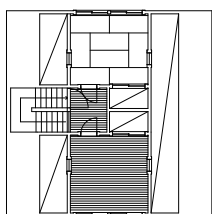
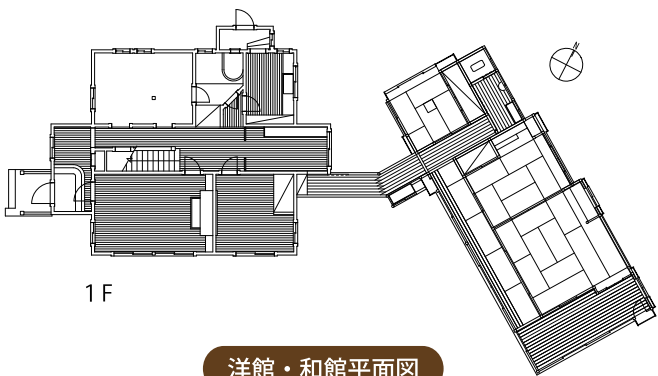




洋館立面図（南）

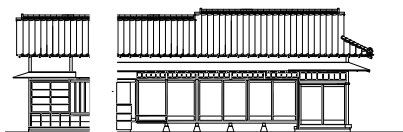


2F



1F

洋館・和館平面図



和館立面図（南西）

※渡り廊下は省略



DATA

令和3年10月14日登録

洋館

和館

設計：川崎忍

設計：宮下 棟梁：森

木造2階建 軸組構法

木造平屋建 軸組構法

建築床面積：98㎡

建築床面積：87㎡

半切妻屋根ガルバリウム鋼板葺 入母屋、北面は切妻棧瓦葺

外壁：下見板、一部掻落し

外壁：下見板、一部左官仕上げ

■見学のご案内

建物見学は通常実施しておりません。
ただし、所有者が建物の一部を活用し、カフェを営業しています。
詳しくは下記よりご確認ください。

<カフェおきもと>

<https://cafeokimoto.wixsite.com/index>

■交通のご案内

[住所] 〒185-0023 東京都国分寺市内藤 2-43-9

JR国分寺駅南口 / 徒歩約8分



国分寺市教育委員会 〒185-0023 東京都国分寺市西元町 1-13-10

ふるさと文化財課 Tel 042-300-0073

令和3年10月発行 e-mail bunkazai@city.kokubunji.tokyo.jp



国登録有形文化財

沖本家住宅 洋館・和館



沖本家住宅

洋館は、昭和8(1933)年に広島県出身で関西を拠点とする貿易商の土井内蔵^{※1}の別荘として建てられた。設計は土井内蔵の甥にあたる川崎忍である。その後1年ほどは東京の学校へ学びにきた娘の土井アイリンが暮らしていたが、昭和12(1937)年に同郷である沖本至^{※2}に譲渡され、住居として使用された。昭和15(1940)年には沖本至によって主に来客用として和館の増築が行われた。洋館と和館は渡り廊下によってつながれている。

洋館・和館ともに大きな改修なく現在に至っており、ほぼ建築当初のままの様子を見ることができる。

国分寺市内には、大正期から国分寺崖線沿いに富裕層の別荘が建設された。沖本家もその流れに連なるものであり、敷地は国分寺の平兵衛新田飛び地の一部を購入したものである。

- ※1 土井内蔵(1883～1969)広島県出身。日本で初めて列車自動連結器、オーチスエレベーター、タングステン電球などを輸入した貿易商。
- ※2 沖本至(1888～1993)広島県出身。海軍少将。退役後は日本石油相談役を務め、その後土井内蔵の経営する土井株式会社に勤務した。

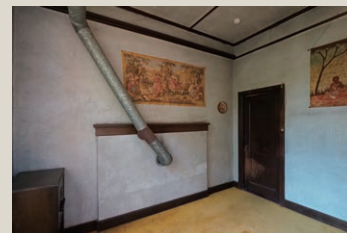
洋館の設計者

川崎忍(1890～1972)



土井邸時代の玄関に立つ川崎忍(左)と土井内蔵(右) 川崎家所蔵

広島県で生まれ、14歳で父親と米国に渡り、カリフォルニア大学で建築を学ぶ。帰国後、J.H モーガン建築事務所などを経て、昭和3(1928)年に川崎建築設計事務所を開設。弘前女学校、立教女学院ギムナジウム・寄宿舎などを設計。現存する建造物として、旧松本邸(宝塚市・登録有形文化財)、日本基督教団本郷中央協会(中央区・登録有形文化財)などがある。



洋館

外壁は下見板張りで南面2階と玄関ポーチ上部は黄土色の掻き落とし。屋根は半切妻屋根の銅板(現在はガルバリウム鋼板)横一文字葺き。基礎はコンクリートにモルタル塗り。小屋組みは2階天井裏でキングポストトラスになっている。内装の左官仕上げの壁は、アメリカで流行していたクラブテックスに似せて作られている。また、梁や柱、玄関ドア、作り付け家具、いくつかの造作された置き家具に共通して幾何学の彫り装飾文様が施されている点も特徴的である。



和館

外壁は押縁下見板張りで一部漆喰の左官仕上げ。屋根は入母屋造の棧瓦葺きで北側は切妻。小屋組みは天井裏で和小屋となっている。洋館の食堂より渡り廊下で繋がりが、独立した玄関を持たない。広縁からサンルームまで全て中棧のない一枚の大きなガラス戸が贅沢に使われている。接客用の座敷の続き間には、上質な材料を使用。随所に工夫を凝らした意匠が散りばめられている。



空襲の痕跡

太平洋戦争の後半、昭和19(1944)年11月頃から多摩地域ではアメリカ軍による空襲が頻繁に行われるようになった。日本軍の防空能力が落ちていくにつれ、戦闘機の小口径機銃による機銃掃射も行われるようになる。沖本家も和館に1発、洋館に3発の銃弾が撃ち込まれた。和館サンルームの壁には今も機銃掃射の跡が残っている。

